

## 【私語ワーキンググループ報告】

**私語問題の解決に向けて**To solve the problem of “*Shigo*”

大石 和男      熊上 崇      山口 敬子  
OISHI, Kazuo      KUMAGAMI, Takashi      YAMAGUCHI, Keiko

**要約**

私語防止の基本は、学生の自助努力に頼らずに教員が「ルールの徹底」を図ることである。また、教員の「アカデミック・スキル」の向上に向けた仕組みづくりに加えて、教員の熱心な教育活動に対してそれを評価するシステムが欠かせない。学生の成績評価システムの中で、出席調査を実施するなど強制的に出席させるシステムには再考が必要かもしれない。

**はじめに**

近年、社会状況の変化とともに教育研究環境も大きく様変わりし、大学が抱える問題も広がりを見せている。その中でも、大学生の私語（授業を妨げるおしゃべり）は極めて関心の高い問題の一つである。特に、教育熱心な教員や勉強熱心な学生にとっては人権問題ともなり得るため、私語問題の解決は急務である。これらの詳細については、報告代表者がすでに2013年の立教大学コミュニティ福祉学部紀要15号に「大学における私語問題を考える」として研究ノートにまとめているので、詳細はそちらを参考にされたい。

本報告書では、コミュニティ福祉学部（以下、本学部とする）の浅井学部長の「分析よりも方針化に力点を置いた論議をすすめたい」という意向に沿って、私語問題の要点を整理し、その解決に向けていくつかの問題提起と提案をしたい。

**立教大学での私語分析結果**

まず本学における私語の実態について、要点だけを簡単に述べたい。

**1) 授業評価アンケートの分析による本学の私語**

立教大学において、2013年度前期に実施された授業評価アンケートの分析結果の要点を以下に示す。

- 科目の履修者数が少ないほど静粛性が高い傾向があるが、履修者数が多くても静粛性が高い科目もあり、科目ごとのばらつきが大きい。
- TAやSAを配置することによる、静粛性への影響はあまり見られない。
- 科目担当者が専任教員であるか兼任講師であるかによる、静粛性への影響は見られない。

- ・教員の授業の方法や進め方により、次のような静肅性への影響が見られる。a) 各回の授業内容が明確であるほど、静肅性が高くなる。b) 教員は授業の準備を周到に行っているほど、静肅性が高くなる。

## 2) 本学部での意見

次に、2012年に本学部で独自に実施された調査結果を基に開催された、学部FD研修会（2013年3月12日）における意見をいくつかあげてみた。

- ・年台が上がるにつれて、問題が多いと感じる先生が多い（専任、兼任同じ）。
- ・講義規模が大きくなるにつれて、問題と感じることが多くなる。
- ・初回授業でルールの徹底が重要である（専任・兼任）。
- ・大人数授業でも、最初にルールを徹底する。最初に少し話したときに注意する（注意も協力してくれてありがとうと伝える。雰囲気に戻す）。
- ・学生が、先生が私語を注意してくれないのは困るという意見もある。
- ・私語は学習権利への侵害である。法律レベルで禁止、モラル・ルールで決め、個人的な感性で対応する。それぞれ差がある。教員側でどのようにルールを決め、学生が納得いく内容であるか、モラルについて検討する必要がある。
- ・1回の授業で4,000円の損害になることを伝えたり、人権問題が一番大きいのではないか。ガイダンスで私語は人権問題であるという学生の意識を高めてほしい。
- ・学生は教員の態度をみて、動いている可能性がある。
- ・いかに興味を持たせるかを、追求してきた。関心あることで引き付けていくことを考えていきたい。しかし限度もある。

## 私語の親和要因の検討

次に私語を引き起こすと考えられる一般的な誘因をあげ、それらに対する対処について考察する。

### 1) 学生側の問題としての私語

私語する学生側の問題点として、いくつかの点が挙げられる。たとえばこれまでに、日本人の公私感覚としてのけじめや上下関係の消滅、私的行動としてのテレビ視聴の構図の持ち込み、大学入学以前に「子ども天国」のあつかいを受け許容されることに慣れていること、マジメに対する冷笑的態度などが指摘されている。しかしながら最も注目すべきは、**大学の大量化に伴う不本意就学・不本意在学・不本意出席である**。最後の不本意出席に伴う問題点については、極めて重要な問題であるため、解決の糸口となる可能性がある。

また、これまでの調査では学生自身も私語に困惑する様子がうかがわれたものの、**学生が自ら注意し合うなどの行動がほとんどない点**が指摘できる。しかしながら、学生自身の立場も理解できないわけではない。保身術としての「事なかれ主義」の風潮は深刻である。初等中等教育時代

に受けた「いじめ」の体験、あるいはそれを見てきた体験は、目立つことを避け、大衆の一人に埋没することで自らを防衛することを学ばせるからである。

## 2) 不自然な授業形態

高校生にとって、数百人規模の講義を受けることはまずない。しかもそれまでの50分間ではなく、その2倍近い90分間の講義である。この点に関して、本学部では一部の講義を除いて**大規模の講義を減らす努力**がなされているが、さらなる努力が求められるであろう。

加えて通常の講義では、一方的に話を聴くだけであり、この事態に適應できる学生は決して多くないことが推測できる。この点に関しては、**双方向型の講義スタイルの導入**などが有効に機能する可能性がある。

## 3) 教職教育の不在と教育活動の評価

高校以下の初等教育の段階では、すべての教員は教員免許を有しており、大学の教員とは決定的に異なる。そのうえ、大学教員の採用、昇進などの評価基準となるのはおおよそ研究能力で、それを客観的に示す資料としての学歴、研究業績、学位、賞などである。しかしながら、教育には手間、時間、それにも増して熱意が欠かせない。特に教員の「**アカデミック・スキル**」を高めることは、学生自身の講義に対する興味や熱意をより高める効果が期待されるため、私語の抑制には欠かせないものと考えられる。しかしながら、それらの教員の取り組みについては、ほとんど評価の対象になっていないのが現状である。したがって、「**アカデミック・スキル**」を**教員が積極的に獲得していく仕組みづくり**が必要であろう。

また文部科学省は、教育研究の両面での教員の評価を求めているものの、対象が初等中等教育の教員にとどまっており、大学の教員にまでは及んでいないのが現状である。**学生の授業評価をどのように組織の中での教員の評価へつなげるか**、処遇上も報われるシステムを構築するかについての議論が必要である。本学においても、教育改革推進会議で2013年度の課題として「授業中の私語」を挙げ2013年度第6回教育改革推進会議(2013年11月28日)において「授業評価アンケートの一層の利活用」の確認がなされた。しかしながら、具体的な活用法についての検討はなされていない。

この点に関しては、諸外国のシステムに学ぶところも大きいと思われる。たとえば、教育に特化した教員と研究に特化したそれぞれの教員を分けて採用している大学も少なくない。前者は教育の効果で評価され、後者は研究の内容や質、それに獲得した外部資金の額の総額などで評価される。

## 4) 出席調査実施による出席強制に関する問題

日本における通常の講義では、講義時に出席調査をすることが通常である。実習科目などの特殊な場合には、技能を学ぶという目的が優先されるため、出席状況の確認は必然であろう。しか

しながら、人数の多い通常の講義科目ではいかがであろうか。

報告者が2014年10月に実施した北米やオーストラリアの事情を調査した結果では、**通常の講義科目では出席調査を実施しないのが通例**であるばかりでなく、調査することが禁じられている場合もあるという。これは、大学教育は「義務教育ではなく、もともと自ら学ぼうとする場である」という認識が根本にあるため、出席確認するという考えが教員学生ともにならないためということであった。そもそも出席状況に関係なく、最終試験に合格することが単位取得の条件なのである。

この背景には、日本と諸外国の違いに関する種々の要因が考えられる。第一に、講義に参加して努力する過程（process）を重視するか、あるいは試験に合格（pass）する結果を重視するかという文化の差である。第二に、教員・学生の講義に対するモチベーションの違いである。上述したが、一般に日本では教員側には学生による授業評価が具体的には何の客観的な影響を与えないという事情がある。そのため、実際には講義に振り向ける努力が報われないということもあり、その熱意が低下しやすい。第三に、講義に対する概念の違いが考えられる。日本では、「講義」は一般に教授から学生へ知識を伝達することが目的であるため、教員中心の授業になりやすい。これに対して諸外国では、学んだ知識を使ってディスカッションできることが目的であるため、学生中心の講義になりやすい。

日本における高等教育のシステムにも評価すべき点は少なくないが、私語防止の観点からは諸外国のシステムに学ぶべき点は少なくない。これまでの調査の中では、**出席調査を止めたところ私語が劇的に少なくなった事例が多く報告されている**。

### 解決へ向けた具体的な提言

大規模な人数を対象にした講義は、ここ数年で減少傾向にある。また、双方向授業の可能性を探るFD活動も始まっている。これらの現状を踏まえて、現時点では以下の提案をしたい。

#### 1) 「ルールの徹底」と「リレーションの構築」の重視

教育心理学の分野では、教育効果を高めるためには「居心地の良さ」と「やる気のある」クラスづくりの重要性が欠かせないという認識は常識である。具体的には、「ルール」と「リレーション」という二つの要素がキーワードになる。特に「ルール」は最も基礎になるもので、これを抜きに教育は成立しないといわれるほどである。したがって、私語の問題を解決するには、教員が私語を認めないことを表明し、その覚悟も示し続けることが重要になろう。「ルールの徹底」に関する具体的な方法の一部は付録に記した。

#### 2) 「アカデミック・スキル」獲得の仕組みづくりと教員の評価の多様化

上述のように、教員の「アカデミック・スキル」を高めることは、学生自身の講義に対する興味や熱意をより高める効果が期待されるため、私語の抑制には欠かせない。しかしながら、これらの教員の取り組みについては何ら評価の対象になっていない。「アカデミック・スキル」獲得

に熱心な教員、あるいは学生による授業評価アンケートの評価の高さなどが何らかの利益を伴うなど、実際の評価につながる仕組みづくりが望ましい。

### 3) 成績評価方法の柔軟性

上述のように、興味や意欲がないにもかかわらず強制的に講義に出席を強いられる不本意出席が私語に結びつきやすい。したがって異論もあるであろうが、私語の多い講義では、興味を示さない学生を強制的に出席させる仕組みや、出席調査の結果を出席点などの形で評価の対象にする仕組みなどを再考してはどうか。加えて、成績評価の方法については、今後ともグローバル化や多様なニーズ合わせた教育の目的に沿って柔軟に対応することが望ましい。これらを具現化しようとする試みの一部は、付録に記した。

### 4) 学生側の自助努力には期待しない

上述のように、現時点では学生の自助努力に頼るシステムを導入することは困難である。したがって、まずはこれに頼らない教員主導の私語防止策を考えるべきであろう。

## 付 録

### 1) 各大学の私語抑制の試み

日本の大学で実施されている私語抑制の試みの主なものを、HP等から抽出した。

- ・HPや広報誌で、私語をしないように呼びかける
- ・講義系の主な科目で、座席指定を義務付ける
- ・ゲーム機を授業に導入し、興味を引き付ける
- ・大人数の講義で出欠をとったり、注意を促したりするアシスタントをつける
- ・講義の初回に私語に対する姿勢を明確に示す
- ・学生の顔と名前を一致させて関係性を構築する
- ・ルールの周知「私語すれば、まずは減点、つき除名」と黒板に大書する
- ・ルールの実行 学生証(免許証、会員カード…)を提示させて学籍番号と名前を記録する
- ・途中10分間を「ハーフタイム」として、質問や自習時間を設ける
- ・教員としての礼儀や師弟関係を明確にする
- ・生徒とのコミュニケーションを大切にする

### 2) 「ルールの徹底」に関する具体的対応事例

- 1 大学の授業は出席することが当たり前であるので、出席確認はとらない。
- 2 私語や居眠りは、他の学生に心理的なさまたげとなるのでこれを厳禁する。
- 3 私語が起きた際には当該学生を見据え、それが無理な場合は、会話を中断する。
- 4 それでも止まない場合は、当該学生を口頭で注意する。その際には、怒りをなるべく抑え、

なぜ話したかったら退席するなり、質問するなりしなかったのかについて聞く。

5 授業の始めに宣言したことを学生に確認させる。応じない場合は、最初に明示した契約の概念に違反していることを再三にわたって確認させる。

詳細はHP (<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/991111AC09.html#4.5>) を参照されたい。

### 3) 興味深い講義事例

出席は取らないが、授業中に発言をカウントして、発言した人にだけ出席点を付けるという事例を紹介する。

素朴な疑問ほど、本質を突いている可能性があるため、発言の内容は一切問わずにどんな発言も1回1点とする。また、発言できるのは前の席の人を優先にしているため、学生がどんどん前方に座って挙手するという。詳細はHP (<http://shiology.com/shiology/2014/05/3661-140430-e21.html>) を参照されたい。